

第IV部門 都市オープンスペースとプライベートな「庭」の形態的相違に関する研究

大阪工業大学工学部 学生員 ○北川 慎司
 大阪工業大学工学部 学生員 浅野 俊輔
 大阪工業大学工学部 学生員 伊藤 晃生
 大阪工業大学工学部 正会員 田中 一成

1. はじめに

都市内部オープンスペースにおいて発生する問題の根本的な部分は、人々の意識に影響を与える形態的な部分と、それを創り出すデザイン手法にあると考えられる。プライベートな庭と都市内部オープンスペースでは、根本的にそのデザインの手法が異なる。つまり、伝統的に築きあげられてきた庭園を創る手法と、主として欧米の事例を参考にして近代以降に作られてきた公園や広場のデザイン手法が、異質である点に問題があるのではないだろうか。

2. 研究の目的と方法

本研究では、都市内部オープンスペースとプライベートな庭の形態およびデザイン手法の相似性について、その有無を検証し、都市内部のオープンスペースの今後のあり方に対する示唆を得ることを目的とする。

ここでの相似性とは、座るという機能において例えば目的性が不明確であるプライベートな庭で使用される石や、目的性が明確である都市内部オープンスペースのベンチなど、機能的な相似を示す。ここで何らかの相似性あれば、プライベートな庭の石を本来の都市内部オープンスペースに活用することができるはずである。

研究の方法として、まず都市内部オープンスペースとプライベートな庭に設置されている物の素材の特質と相似性を調べる。次に、都市内部オープンスペース（公園）は旭区（図－1）、西区（図－2）の住区基幹公園を対象地として施設現況図を用い、一般家庭の庭は図面等の資料を参考にして、公園と庭に共通する空間要素（座る空間、歩く空間、緑空間）を定義した上で3空間要素の面積、面積率を算出する。住区基幹公園の利用状況から良いと思われる公園を採り上げ、一般家庭の庭との相似性を調べる。さらに、相似性を活かして設計が行われている事例について調査し、その方法をまとめ、その結果をもとに、新しい都市空間のあり方について提案を行い、シミュレーションを行う。



図－1 旭区現況図



図－2 西区現況図

3. 素材に関する相似性

素材については公園、庭ともに様々なものが使用されているが、木材、石材、コンクリート等に関しては都市内部オープンスペースと庭に共通して使用されており、これらは類似性があるといえる。しかし、このように一部で相似性が見られるものの、公園では自然的な風合いをもたせたものを取り入れることが望ましいと考えられる。単一の機能に特化した素材と、逆に多機能に利用される可能性が高い素材があり、後者がデザイン上の重要な着目点として有効であることが明らかとなった。

Kosei ITO, Syunsuke ASANO, Sinji KITAGAWA and Kazunari TANAKA

4. 対象地の選定

公園では旭区と西区の住区基幹公園（街区公園・近隣公園・地区公園）を対象地とする。ここでは街区公園に注目する。旭区では住宅街が多く立ち並び、西区ではオフィス街が多く立ち並ぶ。そこで住宅地と商業地、環境の異なる2区の6公園を比較することで、時間帯・滞在人数・公園印象の違いを把握する。

庭では、都市公園との相似性を検証するために、公園に近い要素を取り入れた「休む・遊ぶ」といった機能面に着目点をおいた庭選びをおこなう。公園に近いイメージの庭を都市公園の設計手法と照らし合わせることが選定理由である。



図－3 調査対象公園(旭区)

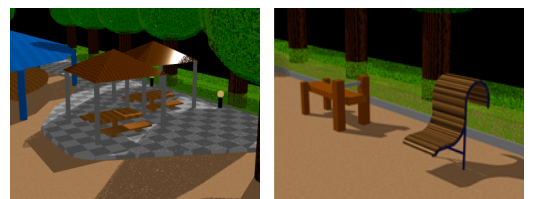
5. 対象地の面積比による相似性の分析

対象公園の内、大宮ふれあい公園では座る空間（ベンチ）の面積率の数値が他の公園に比べて高いことがわかる。庭と比較した場合6公園とも座る空間（ベンチ）の面積率が高い。一般家庭の庭では、座る空間（ベンチ）と歩く空間の面積率が、都市公園とは逆の結果が得られた。これは個人のスペース（庭）では歩く空間を最小限に抑え、座る空間といった休みの場を多く求める傾向があると考えられる。「歩く空間と緑空間」の面積率からも公園と逆の結果が得られた。庭では個人の限られた空間に緑を多く取り入れ、都市公園とは違う自然の楽しみ方を求める傾向があることから、休みの場として緑を取り入れている。

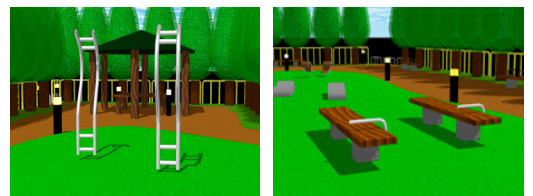
以上の面積から分析した結果として、公園の座る空間における多機能を示すベンチ、大きな芝生空間を庭との相似性として考えることができる。機能性ということに注目すれば、良いと考えられる公園（利用状況調査による）で設置されていたベンチは、健康器具にも遊具にもなり、もちろん座ることもできるという面から多機能であると言える。一般家庭の「庭」にある芝生は、たとえそこに何もなくても座り込んだり遊んだりできる面から多機能であるといえる。これよりこの両者に相似性があると考えることができる。

6. 提案とシミュレーションの作成

シミュレーションの対象として、現況調査によって歩く空間に座り込む動作が頻繁に見られた公園を対象とする。「多機能性」を示すベンチや公園全体に一般家庭の「庭」のような芝生空間を多く取り入れることで、この公園イメージは大きく変わり、歩く空間に座り込むといった現況が解消される提案を行った。



図－4 シミュレーション1映像



図－5 シミュレーション2映像

7. おわりに

今回調査した都市公園の中にも「多機能」を示すベンチが設置されている公園は少なく、このような機能を持ったベンチや遊具が現代の都市公園に多く設置されると、現代の都市内部オープンスペースがより快適に感じられ、一般家庭の「庭」との関わりがより身近なものに感じられるという結果を得た。一般家庭の「庭」の設計手法を都市内部オープンスペースに取り入れることで、都市空間を利用する人々にとって、親近感がありモラルを生み出す空間をつくるためには、一般家庭のようなプライベートな庭の具体的な設計手法を利用するべきである。

【参考文献】 大阪市建物用途別土地利用現況図、

設計から楽しむガーデンデザイン入門 （財）日本花普及センター 2002